

座談会

本多創史／山内明美／イ・ヨンスク／鵜飼哲



鵜飼 『言語社会』は一橋大学言語社会研

究科の紀要ですが、紀要の特集でこのような「アクチュアル」な事柄を扱うということは、非常に例外的でしょう。今年の三月一日に地震、津波、そして原発事故が発生して以来まもなく四ヶ月になりますけれども、この時期を様々な場で、しかし時間的には同時に生きてもいる私たちとしては——人文科学と社会科学の接点で仕事をしている人間として——いくつもの意味で、非常に大きなチャレンジを受けていると思います。このチャレンジの意味を掘り下げる方向で、対話を始めていければと考えて

います。

1 「三月一日」をどう生きたか

本多 東日本国際大学福祉環境学部の本多創史です。三月の地震が起こった直後というのは、大学の中の連絡系統がすべて断たれてしまいましたので、まず職員とも連絡がつかないし、学生さんの安否もまったく確認ができないという状況でした。やらなければならぬこととして最初に思いついた、と言うか考えたのは、やっぱり学生さんが生きているのか生きていないのか、と

いう安否確認をどういうふうにすすめるのかということでした。むろん、その翌日には原発が爆発したわけですので、そういったことも同時に考えてはおりましたけれど、やっぱり自分の職業的なことからして、安否確認を最初にやりました。たまたま岡山のほうに出張している同僚がいて、岡山の方からだ、東京や東北の方にも電話をかけることが非常に容易でしたので、彼をずっとその場所にとどめておいて連絡係をしてもらいました。で、電話等々を通じて、二週間後ぐらいにはだいたい連絡が取れて、基本的には、学生さんは誰一人欠けることもなく、職員も誰一人欠けることがない、ということが分かりました。しかし、その親、あるいはその祖父母、親戚を含めますと、膨大な数の人々が亡くなっているということもまた分かりました。

学校を始めるにしても、精神的に動揺している人が多いことが予測されました。教員の集会みたいなことを一回、三月の終りにしましたが、先生の中には非常に感情的になっていく方もいらっしゃいました。その方は被害の大きい地域にお住まいでした。

このような状況の中で、それでも大学を始めなければいけないということで、五月から大学を始めました。最初の頃は、放射線量の問題なんかもありまして、ほんとに大学を始めるべきなのかということをやっと悩んでおりまして、福島大学の有志の先生方も、完全に安全と言えない中で大学をやっているのか、という問題を提起した方もいらっしゃったので、非常に懐疑的ではありましたが、とりあえず、学校の方針というところで始めたようなわけです。

適切な言い方が思い浮かばないのですが、自分でも不思議なことがあります。それは、「放射線に慣れてきた」ということです。この一ヶ月の間に私自身の中で変化があった、それは、放射線量の問題を忘却するということが自分の中で起こっている、ということとです。それは毎日学生と接して、あるいは、授業をやったりして——という、いわゆる日常生活の側に戻りつつあるということが大きいのと、あと、放射線量の問題というのは、どうしようもないから、ということもあります。どうやっても逃げる事ができないし、そこにあるのですし。

自分でも原因はいまいちよく分からないんですけど、まわりの人たちも同じだと言っています。放射線量の問題がほとんど意識にのぼらなくなっているというのが、今の状況です。

今回のこの、二〇一一年三月十一日一時四十六分に発生した地震、この地震という自然現象自体の名前は、東北地方太平洋沖地震です。ところが、マスコミやら我々が語っているのは、東日本大震災なのです。当たり前なことかもしれませんが、この二つは別物だということを、まず最初にきちんと確認しなくちゃいけないかなと思っています。地震イコール東日本大震災ではたぶんなくて、地震によって引き起こされた巨大な人間社会に与えた様々な影響、被害等々を含めて、おそらく東日本大震災というふうに呼んでいるんだろう、と。また、この太平洋沖地震の余震によって起こされた人間社会に与えた巨大な影響も、東日本大震災の一部に入れるべきではないだろうかと思っています。したがって、静岡で起こった余震後の被害とか、あるいは栄村の被害とか、あるいは千葉県内での液

状況現象の問題とか、そういったことを含めて東日本大震災というふうに定義をしていく必要があるかと思いますが。と言いますのは、どうも東北地方太平洋沖地震と言いますと、文字通り地理的な東北地方しか思い浮かばない。そうしますと、実は福島に接している茨城というのは関東地方に属しています、茨城の北の方は、この地震によってズバズタになっておりますけれども、ほとんどマスコミにも取り上げられないで忘れ去られております。これはおかしいことであって、地震によって引き起こされた巨大地震全体を東日本大震災と叫ばないと、問題を正確に捉えられないのではないかと、見落とすんじゃないかなという感じがします。また、このように捉えますと、原発事故による被害を含む形で議論することが可能になります。

それから、一橋生を非難するつもりは毛頭ないので、誤解しないでいただきたいのですが、地震の後に一橋の卒業生とか、一橋の院生の方々としゃべったりする中で、東京にいる一橋関係者が、マスコミの流す情報を、あまりにもまじめに受け取ってし

まっていることが非常にはっきり分かりまして。現場で起こっていることと、マスコミが流すこととの間にはすごく落差があって、その落差を埋めるのにエネルギーを使いました。何回喋っても、ほとんど分かってもらえない、という経験をしました。これは阪神・淡路大震災の時も同じことがあったようですが、なんて言うんですかね、マスコミが出してくるデータを鵜呑みにしないで、むしろそれを基にして、現実起こっていることを的確に想像する、そういう力の欠如みたいなことを——ひどい言い方かもしれませんが——考えたりしました。

最後に概念の問題です。三月一二日に原発が爆発して、東京電力の原子力発電所が東北地方にあるという、この、構造的には植民地のように見えるような事態が明らかになったわけですが、私も、やっぱり最初は、「植民地」という言葉で表現をしていましたけれど、よく考えてみると、東北はいわゆる植民地ではないわけですし、あくまで日本の国内で起こっていることなので、植民地という表現は的確ではない。また植

民地主義というのも概念的には当たらないというふうに思います。また帝国主義というのどうかと思えます。搾取と被搾取という関係は間違いなくそこにあるのかもしれないけど、つまり実は東京と東北の状態を一言で言い表す言葉が、不在なんじゃないか。これは沖縄に関しても言えるかもしれない。原爆が日本で一番多い福井県に関しても言えるのかもしれないけれど、この今起こっている事態を一言で言い表す概念がまったく不在だということを思ったりしました。

山内 言語社会研究科の博士課程三年の山内明美です。私は実家が宮城県南三陸町で、今回の甚大地震と大津波で町は壊滅状態になりました。テレビや新聞などで報道されている通りです。三月一日から今日まで、気の遠くなるような長さでした。ほんとにいろんなことがあって、四ヶ月前のことが覚えていられないような状況になっています。けれども、被災地の復興は遅々として進んではいけません。

三月一日のお話をします。私は大学の小平キャンパスの寮の八階に住んでおり、



あの日も部屋にいました。部屋の本がすべて落ちてくるほどの、大きな揺れでした。

国際学生宿舎は、二〇〇〇人ほどの留学生が住んでいるんですけども、地震とともに外国人留学生の大きな悲鳴と泣き叫ぶ声が聞こえてきました。私も、もうどうしたらいいのかわかりませんでした。男子学生と一緒に、八階から非常階段を転げるように降りて、なんとか避難をしました。中国人留学生の女の子が転んで膝から血を流していたり、あまりの恐怖で日本人の女子学生も階段の所で泣き崩れていました。あの日は東京でも交通機関が麻痺して、多くの「帰宅難民」が出ました。大きな揺れがお

さまってから、しばらく余震が続いていました。自分の部屋に戻るのが怖かったので、駅の近くまで歩いて、テレビの見られるラーメン屋に入りました。そして、そこで、いま起きた地震が宮城県沖地震だということ、テレビのニュースで知りました。大津波警報が出されていて、確実に自分の実家の町にも、津波が襲うだろうということが予測されました。もともと、このときは、町が壊滅するような巨大津波までは想像できませんでした。……。

三陸沿岸に生まれ育った私たちは、小さい頃から津波の教育を徹底して受けています。五一年前にはチリ地震津波という、チリで起きた地震がもとで町が大きな津波に襲われたことがあります。そのときも、私の町では四二人の方が亡くなっているんですが、五一年前の津波は、公式的な記録でも二・五メートルの規模の津波でした。ですから、町の人たちが想定していた津波の大きさというのが、三メートルぐらいのものだったのです。しかし、今回来た津波は、その一〇倍近い大きさでした。一五メートルとも二メートルとも言われていま

す。場所によってはもっと大きい津波が来ています。だいたい四階立てのビルの高さの津波が町を襲ったことです。今回の津波が、仮に大阪を直撃したとすれば、大阪府全域が水没、東京ですと、八重洲のあたりの埋立て地はほぼ壊滅で、かなり内陸まで破壊される規模です。

とにかく混乱していました。地震の直後には、こんなに大きな津波が来て、原子力発電所の爆発事故が起きるということも想像などできませんでしたし、まさかこんなにたくさん犠牲者が出て、被害がこれほどまでに広範囲だということも考えが及びませんでした。これはとてもない災害になってしまっている、というふうに感じたのは、翌日、自分の実家の町の映像を上空から映されたのを見たときでした。とにかく、何もなかった。そこにあるべき建物、ですね。自分が毎日通っていた、通学路とかですね、すべて何もなかった。水没していて、自分のふるさとの風景ではまったくなかったのです。もちろん、家族とはまったく連絡がつきませんでした。一週間後に父親とやっと電話が通じて、家族がなんと

か無事であったということを聞きました。親戚の叔父や叔母は四ヶ月経った今でも不明です。安否は分かっています。かなり沖まで津波に流されてしまったのだと思います。南三陸沿岸の町というのは、今ももう、漁村にしても、農村にしてもほとんど限界集落の寄せ集めのような場所です。みんなが血縁のような町なんです。ですから、今回の津波で家族や親戚や、自分の身近な大切な人を亡くしていない人は誰一人いないのです。実家に行けば、誰がしか身近な人を亡くしています。ほんとに、帰れば「喪の作業」。なんと言いますか、鎮魂状態。この状態はしばらく続くと思うんですけれども、いま三陸沿岸の町々はそのような状態です。被災地は、思うように復旧が進んではいけません。この間の政治的な混乱に歯痒さと苛立たしさを感じています。がれきがこちら側からそちら側に寄せ集められたというような状態以外は、何も変わっていません。復旧が思うように進んでいないというところが、とても苦しいのです。

二日目の昼間だったと思います。この大学で韓国語の講師をされている梁澄子さんからお電話をいただきました。彼女は、電話の向こうで叫んでいました。「山内さんどうしよう、宋神道（ソン・シンド）さんが見つからない、連絡取れなくて、どうしたらいいのかわからない」と言っていました。もし自分が女川まで行けたら、なんとかしたいと思っていたのですが、道路が寸断されていて、福島原発事故で、宮城県に入る道が途絶えてしまっていました。地震の三日後に、知り合いと一緒に仙台の方を目指したんですけれども、私は結局山形から先の仙台へ進むことができず、泣く泣く東京へ戻りました。福島原発爆発の直後で、仙台市内には被ばくの噂が流れていました。放射能汚染の大変な不安が仙台を覆っていました。震災後に、アメリカの空母が仙台港に「ともだち作戦」のために停泊していたのですが、そのアメリカの空母が、福島原発の爆発を受けて、青森沖に退避してしまったことで、仙台の町の中は、大変なパニックになっていました。つまり、米軍がいなくなりました、撤退してしまっただけ、仙台は見放されてしまった、と。あまり報道にはなっていないかったです。

けれども、そういう噂を聞きました。そういう状況になっているから「仙台に来るな」というふうに言われて、そのまま新潟経由で東京に戻って来ざるを得ませんでした。あの時はほんとうに悔しくて、悲しくて、新幹線の中でずっと泣いていました。もしそこで女川までなんとか徒歩でも入れたら宋さんを探しに行こうというふうにも思っていたのですけども。そういうわけで、結局戻って来ざるを得なかったのです。宋神道さんが見つかったのは、その五日後ぐらいだったか——ちょっとはっきり覚えていないのですけれども。私の友人でもある、仙台在住の韓国人女性が、がれきを超えて女川まで行ってくれたのです。宋さんを見つけてくれました。

けなんですけど、最終的には、避難所の体育館に宋さんはいたんです。無事、救助されていました。

いま私たちが直面している問題にどう向き合っていくのか。「試されている」と思っています。先ほど本多さんも仰っていました。が、とにかく言葉が見つからない。ナショナリズムだとか、国内植民地、植民地主義とかとりあえず言っていますけども、なかなかそういう言葉でも表現できない「余白」があります。戦後日本のあらゆる問題、沖縄、水俣、あるいは今回の宋さんのように、「在日」のこと。日本が置き去りにしてきたあらゆる歴史の断層がこの地震によって表にすっかり出てきてしまっています。この一つ一つを検証することなしに、おそらくこの震災復興はないだろうというふうに思っています。

(写真を見せて) これは、私の実家の南三陸町震災翌朝の写真なんです。これを撮ったカメラマンも知らなかったようなのですが、ここに映っている女性は中国からのお嫁さんなんです。この写真を母に見せたら、「あらワンさんだわ」と言うんですね。お

姑さんを背負っている。これがワンさんで、ワンさんのお友達、やはり中国のお友達で、たまたま南三陸に遊びにきていたそうです。この写真、とても象徴的だと思って、今日持ってきたんです。「東北」の農村は、もはや日本人だけの社会ではありません。すでに、多国籍社会です。中国、韓国、あるいはフィリピンとか。外国からのお嫁さんがたくさんいます。私の父は、避難所へ毎日行っていますが、中国から来たお嫁さんと話をしていると、何を何度か目にしました。決して少ない数ではありません。今回、南相馬で酪農をしていた男性が、家族離散と放射能汚染を悲観して自殺してしまった悲しい報道がありましたけれども、その方のお嫁さんはフィリピンの方でした。放射能汚染を心配して、フィリピンへ奥さんと子どもが一時的に帰っていたときに、男性は「こんなはずじゃなかった」と遺書を残して自殺したのです。この震災で表れてきた出来事は、農村、漁村のいろいろな断層をめくり上げています。「日本人」社会のだけの震災では決してありません。そして、福島原発事故は、「福島の問題」だけでも、

あるいは「東北の問題」だけでもありません。依然として、私たちは、この震災と放射能汚染の中で、なにがどのように変化をしいられて、どんな「侵害」を受けているのか、出来事の総体をつかめてはいないと思います。

イ お二人のは当事者のお話で、とても感動しますね。私は三月一日の時はサバティカルで海外にいました。

鵜飼 カナダの方に？

イ ええ、カナダに。寝いたら電話があったので、時差があつたので、朝でしたが、それからたくさんの方々からメールが来ました。テレビをつけてみると、地震と津波の話をしていました。私は長い間日本にいるわけですが、日本の中では、日本の近代をなるべく批判的な目で見てみようという仕事をしていましたけれど、ああいう映像を見ますと、もう自分の身体の一部がとれていくような、なんとも言えないつらさを感じましたね。三月一日から三月末まで、充実したサバティカルの最後の時間を過ごそうと思っていたんですけれども、すっかりその時から時間の流れや私の生活の毎日



が変わってしまいました。インターネットで日本の新聞を見たり。それから新聞を見ると、日本があんまり情報を公開しないということが話題になっていたので、いくつかの国のニュースを比較しながら、一体これはどうなっているんだろうか、と考えこみました。ちょうど私がいる大学で、日本人の学生を含めて慰める会をするから、日本人じゃなくても、日本から来ている人はみんな来てくださいと誘われました。で、私は日本にいる時には、なるべく異化の方向に自分のアイデンティティを持っていたんですが、外国にいと日本の代表にいつの間にかなってしまう。で、その会に出席

したんですね。かなりの方が、日本のことを心から心配している、心から応援している、という様子が本当に見えてきたんですね。それで結局、三月末に帰ってきたんですけども、その大学で親しくしていたアラブ系の女子大学院生たちが、私が帰るときに、私を息が切れそうになるぐらい抱きしめて、涙ぐんで日本のために私たち祈るから、祈るから大丈夫だから、と言って、私を日本に送り出してくれた。バンクーバーから日本に帰る飛行機は本当にガラガラなんです。だから、帰りはだいぶ楽に帰ってきました。隣に人もあまりいなくて、成田も人がいなくて、ああ、こんなに変わってしまったんだなというふうなことを感じました。

日本に降りた時には、いろんな感じ方があるかもしれませんが、私ほっとしたんです。ああ帰ってきた、と。実はですね、早く帰ってどんな様子が見たかったんですね。見て、それで、山内さんのことがとっても心配だったので、とにかく日本に早く戻って、知り合いに会いたいという気持ちがありました。よく外国から来ている人が怖く

て出ていったということに対して、日本人の方はとても寂しい思いをしている人が多いんですけども、それはそれで立場があるし、私の場合は生活基盤もこっちにあるし、いろんな人に会いたいという気持ちがあったし、成田に降りたら、割とほっとして、でもマスクはちゃんとしてリムジンに乗ったんです。その後の二つの反応が面白かったですね。よく帰ってきたね、みんな出ていったのにと。少し感謝の言葉をいただく場合もあって（笑）。それとうひとつは、帰ってきましたという、海外のマスコミで大変だったでしょう、と言われるんです。日本を攻撃して、と。日本は世界からいじめられているという意識は近代日本の底流に流れていると思うんですが、そういう被害意識がもろに出てきている。私は何人もそういう話を聞いていたので、その中で、私、二人ぐらい女性を泣かせてしまったんです。普通に言ったんですけどね、あの、そんなに変な報道はされていませんよ、と。むしろ日本のことを非常に応援していて、たとえば韓国だったら、慶応大学と延世大学は姉妹校なんです、延世大学が被災学

生への義捐金として慶応大学に三百万円寄付してくれたんです。それは全然新聞にも出てませんね¹⁾。韓国人もけっこうスケールが大きいなと(笑)。そういうことを報道すれば、日本社会が持っている、ねじれた近代から出てきた被害意識がもう少し修正できるのに、なぜマスコミはそういうことに全然触れないのかな、と思います。そういうことを話していたら、二人の女性が泣いてしまったんですね。私に叱られたと思ったらしくて。困ってしまったんですけど。それが面白い反応だと思いました。

日本の中では私は韓国人、朝鮮人、というアイデンティティを象徴的に保っていくために、かなり自分の中に緊張を保ちながら生活していたんですけども、震災以降は、日本社会の一員としてという意識も非常に芽生えて、積極的になにかをやっていきたくない、とも思っています。いわゆる括弧づきの「日本人」が入れてくれなくても、「どいて」と中に入って、この社会を良くしていきたい。その意味で、後で話になると思いますけど、研究そのものももう一回見直していきたい。それから、日本で生ま

れ育ったわけじゃないから、やっぱり感性も少し違うんで、違う感性がちょっと入った方が日本にとってもいいかなという感じがします。新聞を開けても、本当の被災地の現状というのはちゃんと報道をしないままに、よくがんばったねという、あんまり意味のない言葉が出てきている感じがするので、そういうのをちょっと剥がして、本当の現実を見ながら、だけど修復に向けてのユーモアというか生命力を、外から入れていくべきであると思います。もしかしたら、日本に生まれていない人たちがここに一緒に参加することによって、可能になるんじゃないかな。地震は別としても、原発の問題は日本だけの問題ではないのだから、それを本当の意味の、本当の本当の意味での共生、共に生きる、ということが始められるようなチャンスにすべきだと思います。もう一つ感じたのは、日本の政治家は、大震災の前はいろいろ政治の問題でケンカばかりしているなという印象があったんですけども、これを機にもしかしたら団結して、これに乗る越えるような姿を見せるのだらうなと思っていたら、今のところ、

あんまりその期待に応じていないですね。もう少し違う側面を見せてほしいと思います。

鵜飼 ありがとうございました。言語社会研究科の紀要ですので、やはり、私たちのゼミのことを話さなければならんと思います。山内さんもゼミの重要なメンバーですが、ほかに何人か、被災地出身、あるいは被災地で幼少期を過ごした人がいます。大学という場でこの問題を考えるとき、三月一日という日付が、二つの学年の間にあったということの意味は小さくないと思います。帰郷するには少し早い時期だったので、多くの学生はこちらにいました。しかし、ちょうど二〇一〇年度の仕事がほぼ終わったところだった私たち教員も含めて、みなが動き出そうとしていた時期でもありました。学年の最中に出来事が生じていればまったく違ったでしょうが、この時期私たちは、かならずしも同じ場所にいたわけではありませんでした。私自身、仕事で関西に行き、その後私用で沖縄に向かうなど、三月後半は比較的東京にいる時間がありました。ゼミが開かれないために顔を

合わせて議論ができない期間、ゼミのメーリングリストを通じてさまざまなメッセージ、呼びかけが交差して、今思いついても息が詰まる、胸がふさがりような展開になりました。言うまでもなく、インターネットの活用の仕方、その利点や欠点も、現在進行中の出来事の一部をなしています。ツイッターやフェイスブックなど、様々なインターネット・メディアが被災地でも活用されました。数ヶ月前までは、アラブ世界のチュニジアやエジプトの新しい世代の社会運動の文脈で語られていたことが、日本では震災以降、別の形で経験されたわけですね。

一月ぐらいには来年度のゼミで何をするか決めていましたが、震災以降全面的に変更せざるをえなくなり、夏学期のゼミでは震災以降の状況をテーマにすることになりました。ただ、私にはどうしても「三・一一以降」という言い方がしっくりきませんでした。日本の戦後の歴史を考えると、「一九四五年八月一日以後」の断絶が語られながらも、社会のルールが表面上変わっただけで、思想的には単なる「乗り移

り」に終わってしまい、結局本質的な変化に至らなかったという経験があります。また、今回この日付が、アメリカの〈九・一一〉とのアナロジーで強調されていることは明らかのように思えます。むしろ、先ほど山内さんが言われたように、三月一日の震災とそれ以降の事態の中で日本の近代をトータルに再考することが必要でしょう。むしろ、時代としてはおそらく近代だけに収まらない。本多さんが指摘されたように、「東北」という言葉はいつ、どのように生まれたのでしょうか。日本という国は南の境界はむしろはっきりしている、沖縄はもともと日本ではない、北の境界ももちろん、北海道が日本ではないことははっきりしている。しかし、歴史的な存在としての日本の北辺は北海道と本州の間に引かれているのではなくて、東京から青森までのどこかに、見えない形で、つねに引かれてきたと、つねに感じ、考えてきました。それは綿密に展開することが大変難しい事柄です。東京という首都が食料や電力の供給を基盤としつつ、いかに全体として成り立ってきたのか、機能してきたのか、〈三・

一一〉以前、この社会はすでにどういふものだったのかということが、三重の災厄という例外的な光のもとで照射されているのではない。そのような意味で私たちは、「〈三・一一〉とその前後を考える」というタイトルでゼミをやってきました。『世界』五月号の特集をテキストにしながら、山内さんのお力もお借りして、少しずつ、東北について基本的な事柄を学んでいきました。また、原発労働者の労働条件も何度か取り上げ、七〇年代から現在に至るまで、沖縄出身者の原発労働者がかなりの率を占めていることも学びました。それから東北地方には、たとえば郡山に朝鮮の民族学校があります。東北地方の在日朝鮮人共同体がいかに形成されたのか、宋神道さんが女川に戦後住まわってきたことの歴史的背景はなにかといったことも手探りで勉強してきました。今この事態に対し、全社会領域がそれぞれに対応してきていますが、その中で大学が、またその中で人文科学と社会科学の接点で私たちが勉強してきたようなことがどのように問い直されているのか、これから持続的に考えていかなければと思

っています。

2 今、考えること

鶴飼 それでは、再度本多さんに、大学での経験をお話いただきたいと思います。東日本国際大学は福島第一原発に一番近い大学であり、非常に厳しい状況にいらっしゃると思います。先ほど、放射能のことを忘れていくと言われていました。放射能の問題は首都圏でもありますしこの大学でも放射線量を計っていますが、東日本国際大学のような位置で放射能が忘れられていくということはどういうことでしょうか。先ほど触れられたような、どうしようもないという諦念のようなものがあるのか、それとも一番近いがゆえに、放射線量を計れば非常に高い数値が出ることは必至であるがゆえに、一言で言えば状況の厳しさゆえにそうなってきたのか。職場では学生や同僚の方たちはどのように日常を生きておられるのでしょうか。

本多 喋らなければいけないことはたくさんあるんだと思うんですけども。原発か



ら一番近い大学ということ、事実から言いますと、まず文部科学省の役人が慌てて来しました。キャリアの官僚と学長が面談しています。これは私の推測ですが放射性物質がこういう形で、爆発して出たということから、おそらく学生を避難させなければいけないとか、先ほど鶴飼先生が仰ったように、三月という時点でしたので、新入生が入学辞退をするんじゃないかということも含めて、おそらく大学が立ち行かなくなるだろうということで心配して来たんだと思います。ところが、大学の人間たちは、あそこで暮らして、あそこで生きて、そして、これからもあそこで生きていかざるを

得ないという人たちがですね、そうすると、「大丈夫ですか」と文科省から言われたときに、「大丈夫です」と言うしかない、大学を続けていくことが出来なければ、自分たちと、自分たちと一緒に働いている人たち、職員、教員たちの雇用を守れない、ということもある。そういう状況があって、一方で、マスコミが放射能はさほど危険ではないという言説を流すようになっていくわけです。それが本当なのかどうかは分からないにしても、福島で暮らす、あるいは、原発で一番近いところで大学経営している人たちにとって、実はありがたい言説であったと推察します。安全である、ということにお墨付きが与えられたわけですからね。それを大学自体の方針として採用して、それ以外のことは安直に言わないように、ということになりました。

うちの大学は付属幼稚園から中学、高校とあるんですけど、面白いことがありまして。付属幼稚園に入ってくる家庭はハイソな人たちが多いんですね。ところがこの原発の爆発のあと、定員は一〇〇%埋まっていたんですけども、七〇%がなくなっ

たと聞きました。つまり、奥さんとか子どもを関西や九州に送り込んで、夫は医者などの専門職に就いていて、いわきで仕事を続けたり、あとから追いかけていったりしたわけです。ところが、三〇%の人は、逃げられなかった。東北のもとと貧しい、それこそフラガールの町です。また、多くの人は、とくに学歴があるわけでも、高額の金額を稼ぐことのできる会社に勤めているわけでもありません。そういうとくに誇るべき何かがない、いわきに住むごく普通の人たちは、いわきを出て他の土地に移ったとしても、そこでの生活の見込みが立たないということは火を見るよりも明らかなわけです。そうすると「逃げられない」。実際、最初に言いましたようにいわきで生きていくことを所与の前提にしている人々とか、逃げたくてももはや逃げられないというような人たち、つまり、いわきでずっと生きていくという選択をしていく人たちにとって、放射線は安全であるという言説はまことに都合のいい、というか受け入れやすいものなわけです。したがって、「ほんとうは危険なのではないか」とか、「マ

スクをした方がいいのではないか」などという発言に対しては非常に感情的な反論をするわけです。つまりタブーなのです。自分たちはここでずっと生きていかなければいけないのに、その自分たちに向かって危険ですよ、などとと言うのは、本当は危険かもしれないと不安に思っているわけですから、その不安がつまった箱の蓋を開けてしまうような行為に他なりません。

ですので、いわば安全神話は福島こそがもっとも望んでいたという言い方ができるかもしれません。よく風評被害という言い方を使いますが、風評ではないんですよね、実際放射線量は高いわけですから。まったくもおかしいんですけども、ただの風の噂であるという言い方をどうしてもしたい、そうしないともはや生きていられないということがあるわけです。学生さんの中でも、逃げられる人は、休学したり、退学したりいたしました。しかし、そうでない人たちは、そのまま残ったわけですが、今言ったような、もうここで生きていくしかないという腹を括っていると、安全だと自分に言い聞かせるほかにいわけで、意識的に

放射線量のことには蓋を閉じるような行為が行われていくことになるのだと思います。

もう一つはですね、あくまで個人の考えですが、先ほど、鵜飼先生が三・一一ではっきりと時代が変わったという言い方は非常に危険なものに乗っかるかもしれないというお話がありましたけれど、私は他方でやっぱり、八・一五と重ね合わせて考えていたところもあって、人々の意識の転換を期待したところがありました。社会が変わるチャンスではないかと単純に期待をしておりました。とくにエネルギー政策や、原発が地元を持ってきた金など利益ではなくてまやかしかであって、とんでもないものだったと反省し、その土地に住む人々にとっての利益とは一体何かを理性的に考えるチャンスがやってきたと、実は私は思ったんですけれども。その後、四月、五月ぐらいまでは、そういうことを語ることができるような、社会が変わるような雰囲気があったように個人的には思っていました。しかし、五月を過ぎて六月に入ってから、私自身がルーティンの生活に戻ったということもあるんでしょけれど、なんか原発の問題と

か社会をもう少し考え直すとか、ベイコンの「知は力なり」という考え方を見直すとかというような、大きな問題からちゃんと考えていくといったようなことを、急にみなさんが言わなくなっていたような感じを、正直、受けました。私自身もおそらくそういう雰囲気巻き込まれていき、また同時にそれを支えたのかもしれないけど、そういういくつかのことが重なる中で、放射能の問題は私にとって絶対に考えなくてはいけない何かではあるけども、今のところ、大声を出してしゃべろうという気持ちにならない形で現在を迎えた、という感じ

です。

山内 これまで取り組んできた研究の中から、鶴飼先生におっしゃって頂いた、東京から青森までの間の境界線ということについて述べます。私、ずっと東北地方のことについて——最近では、朝鮮半島や台湾へすこし出ているのですが——稲作についての研究をしてきました。日本には原発が現在五四基。気づけばこんなにあったのか、というような状況です。北陸、それから東北地方というのは穀倉地帯です。お米がたく

さん作られている場所にこそ、原発があるということはどう考えたらいいのか、と震災以後考えていました。先般、「新しい教科書をつくる会」の西尾幹二さん、保守の方ですが、脱原発に転向されました。ブログに書かれておりますけれども、「豊葦原瑞穂之國を放射能で汚辱するというのは許せない」と²。保守こそが脱原発へ動くべきだ、との声をあげられました。

日本には、「日本人」を意味する言葉として、「稲作民族」という特殊な言葉があります。今まで自分が研究してきたテーマは、そのまさに東京から青森の、あるいは東北地方の境界線、中央と「辺境」とあえて言いますけれども——「稲作民族」をめぐる同化の境界線ということ。「稲作民族」という大きな物語を「東北」が被って行く経過というものを自分なりに考えてきたのです。気がついてみれば、やっと近代の技術革新の中で、農業技術の進展の中で、東北地方でも、青森の下北半島の突端でも稲作が可能になった。あるいは、北海道でも米を作れるようになってきた。「稲作民族化」ともいえるような状況の中で、

日本の寒冷地帯の歩みというのはあったと思うのです。天皇儀礼を語ることにしても、大嘗祭には悠紀（ゆき）・主基（すき）の儀式というのがあって、それは畿内を中心に西日本のコメを天皇に献上するものであったのです。しかし今上天皇の代替わりでは、秋田のコメを献上しました。かつては「異族の地」といわれた土地のコメを献上するという、ある種の服属儀礼の存続を見るわけです。古代から続いてきた「稲作の北上」と、近代の国策による穀倉地帯の拡大と国家の境界線の拡大。前者は宗教や民俗学の範疇であり、後者は社会経済といった分野で考察される事柄ですが、「東北」という場所を考察するには、おそらくこの場所を「低開発」ということだけで括っても解けない部分があります。大地震のあと、そうした「東北」の歴史が抱えてしまった根深い問題について考えざるをえませんでした。

穀倉地帯に原発が併存して建ってきているという一九七〇年代以降の状況をどのように考えればいいのか。一九七〇年代に原発が建ち始めた時期というのは、お米の自

給率が一〇〇%になって減反政策が敷かれて、コメだけでは百姓が生活できなくなった時期であるわけです。それと引き換えに、今度は、痩せた土地での稲作から原子力ムラへの転換を図るという状況が見られるわけです。福島四つの原子力ムラについて、開沼博さんが、先般、修士論文をご本にされましたけれども、「浜通りのチベットの」といわれていた福島県の浜通りに原発を誘致して、「オラが村で東京に電気を送っているんだ、ここには世界で一番進んだ技術を導入されているんだ。」という誇りの中で、原子力ムラが成立していました。そこに乗っかって行く東北地方の——これは言葉が他にないですが——「植民地性」と、ここではとりあえず言わざるを得ないですけれども、つまり、「コメ化」してしまってしまふ、あるいは「原発化」してしまふ東北のメンタリティをどう捉えたらいいのか、メインストーリーを語りがたがる、マイノリティの脆弱さです。

この復興過程の中で私が杞憂というか、心配しているのは、たとえば福島は今、エネルギー転換と言っていますけれども、た

とえエネルギー転換したとしても、これまでのコメや石炭や原発といったような、大きなリスクを背負いながら地方が都市へ従属していくような社会構造が変化しないのではないか、ということです。

結局のところ、震災復興は、日本の経済復興と同義で語られている印象を強く受けます。原発を引き起こしていった構造の残存。震災後、自治体の復興構想がでていまずけれども、たとえば宮城県の場合は稲作農業からアグリビジネス、別の産業への転換などが明示されています。しかし、結局それを同じ構造の中で、ただうわべだけ転げて行くというような状況に危機感を持っています。この原発の構造そのものを根本から見直している政策というものが全く出てこない。あわよくば、この震災を震災特需と捉えて、企業もこぞって経済復興をしたい、というようなプランでしかない。本来に、今のこの原発状況ということから脱却するのは、放射能に対峙することはもちろんそうであって、さらに、根本から「思想」の問い直しを迫られています。

具体的な被災地での生活はもちろんあり

ながら、その復旧ということももちろんありながら、それでも、上がってきたマスタープランは、今までの原発を維持してきた社会構造をそのまま引き受けてきて、さらに強度の激しい経済競争に翻弄されて行く東北の人々の姿が、透けて見える。どこにも希望が見いだせない。ここから転換を図っていけるというような見通しが見えないマスタープランなのです。

福島についても——四ヶ月前までは奇跡的なことで——福島民報や福島民友といった地元新聞にも「脱原発」という文字が出るようになってきました。それだけでも大きな転換だったと思います。先ほど本多さんがおっしゃってくださったのですけれども——茨城の日立のあたりから、福島県常磐周辺はエネルギー地帯であって、昔は炭坑だった。そして、石油への転換があって、その後福島は、原発を配置する土地へとエネルギー革命が図られました。さらに今回は自然エネルギーへの転換ということがいわれています。長い歴史のスパンで見えていくと、今回の福島もまた、一つのエネルギー転換の状態というようにも見えます。脱

原発して自然エネルギーに転換したただけでは変わらない。今回の原発事故の本質というものは、捉えられないだろうという風に思っています。

イ もしこの座談会が、大震災が終わって三〇年後五〇年後に、大きく振り返ってみる座談会でしたら、まずこういう状態をいろいろな角度から冷静に分析するのでしょうか——分析というのは非常に重要なことだと思えますけれども——今の視点からすると、私たちはこの時間を生きているわけです。だから、分析だけに終わるといいうのではなく、生きる姿勢のようなものがほしいと思います。そのようなゆっくりとした時期ではなく、本当に緊急な時なので、今の山内さん、本多さんの話は、良くわかりますし、現場を見て出てきた意見、応答だと理解しています。

しかし、希望が見えていなかったら、私たちは、希望の種を撒いて創っていかねばいけないのです。そのときに人文学は何ができるか。これまでの人文学を振り返って反省してみると、日本の近代を分析してこんなに問題があると言ってみたり、ある

いは、在日に対して、沖縄に対してものなみにひどいことをしてきたと批判したり。それでももしかしたら、私たちはそれを言っで、言葉で終わってしまったのではないかと思えます。だけれども、今は言葉で終わるのではなくて、何かを本当につくっていかねばいけない時なので、少しでも希望の痕跡があれば、それを見つけ、それに水をかけ、太陽の光を注ぎ、そこでそれを大きくするためにどうすればいいか、という非常にアクチュアルな問題をここで考え、発信していかなければいけないという感じがします。そのために、人文学に何ができるのか。

ちょっと話は違うのですけれども、今回の原発のことは見ると、自然科学者はやはり責任が大きいです。自然科学者というのは、本当に、すぐ人間の命に関わる仕事をしているにもかかわらず、社会的な認識も、責任感もほとんどない。原子力に乗かってそれを擁護していくような科学者には、反省の念のようなものは一切なくて、その点で自然科学者の責任は非常に大きいような気がして、私は怒りを感じます。それと

ともに、人文社会学をやっている我々にとっては、少しは分野の違うものでも関心を持ち、それを勉強していかなければならないんじゃないかと思う。だから、本当の意味での「学際」というのが始まらないと、この社会は変わらない。変わらないということだけを言っていられない、変えなくちゃいけないので、そのためには何をどうすればいいのか。私たちはそれぞれの研究テーマがあるわけですから、それをいきなり全部、原子力のことや科学のことにするわけにはいかないのですね(笑)。だから、自分でやっていることを、人文社会科学の研究者は基本的に、時代が違っても、社会に直接関係がないにしても、何らかの社会との関わりを意識するモチベーションがなんらかの段階にあるべきだと思っているし、思っていたのです。しかし、これまでの人文社会学の場合は非常に職人的な研究で、社会に対してかすかな意識もほとんど見えないようなものもありましたが、今回を機にして、研究する人たちが私を含めて——私のための反省でもありますけれども——社会とのかかわり、他者とのかかわ

りを、何かの形で、直接そのテーマを語らなくても研究態度として見直すべきであると感じました。

もう一つは、原子力の問題は日本だけの問題ではないということ。特に、東アジアは良く似ていて、台湾、韓国は良く似ていて。この事故があった後、私の姉が韓国で——笑っちゃったのですけれども——「原子力は安全だ」というようなツアーに誘われて（笑）、研修に行って、すごく良い待遇を受けて、私に、「原子力はちゃんとすれば大丈夫らしい」って言うんです（笑）。日本でもやったそうですね、原発ツアー。何年か前にも同じ形でやっているのですが、これはもう本当に笑ってしまうことなので、それは本当の意味の国際的な努力をしながら、そういう勢力に対して抵抗していかないといけない。慶州（キョンジュ）というのは観光地なのですけれども、そこに住む私の姉と同じ世代、五〇代、六〇代の女性を全部呼んで、バスに乗せて、ホテルに泊らせて、食事をさせて、原子力研究所の偉い人が、プレゼンテーションをしたらしいです。

鵜飼 すごいですねえ。

イ すごくお金をそこに使っている。話を聴いたら、日本も同じようなことをやっ

と。
鵜飼 韓国でこれから出てくるおそれのある言説は、日本や台湾は地震があるから原発を止めた方がいいけれども、韓国は地震がないから大丈夫というようなものかもしれないですね（笑）。私は一応フランスをフィールドにしていますが、今回の事態を受けて、世界で最も原発依存率の高い国というこの国の側面が、あらためて非常に良く見えるようになりました。私はチェルノブイリの事故の時期に留学していましたのである程度現実把握していましたが、フランスの原発開発の歴史を多少集中的に勉強したのは今回が初めてです。日本と共通の点もあれば違う点もあります。いずれも冷戦というコンテキストに大きく規定されていますが、その動機はいわば正反対です。日本の場合、広島と長崎の被爆の現実、五〇年代前半まで、占領中のアメリカのプレスコードのために広く知られていませんでした。一九五四年の第五福竜丸事件のの

ち、はじめて反核世論が顕在化します。杉並区の女性たちが開始した署名運動が広がり、三〇〇〇万を超える数の署名が集まる。すると、この反核運動が反米運動に転化するのを恐れたアメリカがCIAの工作員を送りこみ、読売新聞・日本テレビと組んで、そこに代議士中曾根康弘が関わって、日本における原発推進が始まります。要するに、アジア・太平洋戦争末期の被爆／被曝の経験、アメリカの水爆実験による日本の漁船の被曝の経験が、冷戦の圧力のもとで、逆説的にも原発開発につながっていったわけです。

フランスの場合は一九六二年、アルジェリアの独立と前後して、核兵器開発が本格化します。このままではフランスはアメリカの属国になってしまう、フランスの安全保障をアメリカに委ねてよいのかという議論が出てくる。ソ連＝ワルシャワ条約軍と対峙するなかで、通常兵器では太刀打ちできない小国であるフランスが、核兵器を持つことによって主権的に安全保障を確保するという選択が、第四共和制から第五共和制にかけて確立されていきます。日本とま

ず違うのは、フランスはまず核武装をしてしまった国ということです。左翼の側の核兵器反対の論理も、ともすると核開発技術の平和転用を主張する形を取りました。

一九八一年、ミッテラン社会党政権の成立以後は、核保有も原発開発とともに、左右を問わない「国民的」コンセンサスになっていきます。それはある意味で、フランスが「自律的」に決めたことです。いまや小国であるフランスが、にもかかわらず主権を保持し国際的発言力を維持するためには、安全保障も、食料供給も、電力供給も、可能なかぎり自力で確保しなければならぬ。このような、フランスにかなり典型的な主権に対する強迫観念の中で、核Ⅱ原子力にかかわる決定がなされ、コンセンサスが形成されてきたと言えます。

いまの世界状況のパラドクスの一つは、先ほど本多さんが言われたように、日本におけるよりも外国の方が、福島第一原発事故の深刻さが、むしろ正確に受け止められているということでしょう。直後の事実上の報道管制や政府の対応に大きな問題があったことが第一の原因ですが、台風の眼

というのか、内部にいるからこそ、事態の意味を徐々に軽視するようになっていく傾向もあるようです。先ほど山内さんが触れられたように、日本は近代以前から米作りを中心に拡大してきた国家だったはずであり、四五年前までは天皇自体が稲作の神とすら考えられていた。ところが、そのようにして穀倉地帯化した地域に、なぜ原発が多数設置されるようになったのか。今フランスの世論は一斉に脱原発に傾きつつありますが、それは非常に単純な理由で、福島原発事故によって、食料供給と原発による電力供給という、これまでの主権主義の二本の柱が両立不可能であることに気づいたからです。一回でも深刻な事故が起きたら、食料自給は永久に不可能になる。合理的に考えた場合、原発は他のエネルギーで代替できる。しかし、一回農地が放射能で汚染されたなら、金輪際外国に食料を頼らざるを得ない。こうしてフランスの場合、合理的討論が行われるなら、世論の趨勢が変わり得ることが見えてきた。ところが日本では、戦後の農業政策の転換のなかで、食料自給は五〇年代半ばにはあきらめてしまっ

ている。米の自給率一〇〇%ということが、決して農民にプラスに働かないような農業政策が取られてきた。漁業に関しては八〇年代に劇的に崩壊していくプロセスがあった。第一次産業のこのような崩壊と並行して、食の宝庫であるべき場所に原発が置かれてきたということでしょう。イ先生がおっしゃった韓国の問題については、植民地時代の日本によるダム開発が北部に集中していたこともかわりがあるのではないのでしょうか。韓国が分断体制の中で原発を持つということとは、フランスとは逆に、まず原発から入って、将来地政学的な条件が変わった時に、核を保有する可能性を担保しておこうという意向があるのかもしれない。これは日本の原発開発にも当然言えることです。日本の場合死刑制度が存置されていますが、そこには一年一人処刑するという形でもいいから細々とでも続けたい、国家が人を殺す権利を主権的権力として保持したいという意志が働いているように思われます。原発に関しても、少数でも保持したいという欲望が、フランスとは別のかたちで、主権の問題がかかわって顕在化する



る可能性があるのではないのでしょうか。この国では食料自給は遙か以前に放棄してしまっているの、近い将来フランス人が直面すると予想される矛盾に突き当たることでもあります。言うまでもありませんが、このような問題で矛盾に突き当たらないということは決して良いことではなく、むしろこれほど悲惨なことではないのではないのでしょうか。山内さんが先ほど危惧されていたように、脱原発もまた一つのエネルギー転換にすぎず、これまで通りの努力の仕方では克服できないというタイプの言説の問題も大きい。宮沢賢治のような詩人の言葉がこうしたコンセンサス形成の道具としてまた

しても使われてしまうのであれば、これは非常にまずいことだと思います。この構造を変えるために、人文科学／人文学が、どんなかたちで状況に介入できるか、それがいま問われているのではないかと思います。

3 変革の時間

イ ちよっと質問です。人文学や社会科学が社会の構造を変えるという場合に、具体的にどのようなイメージをもってらっしゃいますか？ それともう一つ。ひとつの社会が変わるというときに、かなり長い時間がかかりますね。長いスパンで見なければいけないわけですから。その時間のスパンを、どの程度の時間のスパンで考えるか。

たとえば革命ですと、一晩で変わると言われてきました。しかし、私たちはその影の部分をごらん見てきているわけですから変わるということはみんなが望んでいるわけですが、どのように変わって、どういう風な時間の流れ、スパンをもって変わるのかということなのか、という疑問を持っています。変わらなくてはいけない、とい

う言葉が、もしかしたら一人歩きするので、さっきのように私は何度も強調してしまうのですが。今はいわゆる「平和」な状況ですね。そのような言葉は一人歩きさせてもいいのですけれども、今はそのような事態ではないような気がします。今はもっと具体的な、人文・社会学にどういうようなことが可能なのか、ということですね。これが質問です。

山内 問われていることがあまりにも大きすぎて、上手く言えないのですけれど、私はずっと農業問題、一次産業というところを足場にしているのを考えてきました。今回の福島状況になって、普通に、当たり前、土や海というものを与えられてきたことが、もう当たり前ではなくなっていました。これから明らかに変わるの、今までのように、作物を育て、魚を採って暮らすという基本的な人間の営みが、極めて困難になる、ということです。これは二年や三年では浄化されない。私自身が、生きているうちに土と海を奪還することさえ困難かもしれません。それでも、土と海をとり戻すことは、私たちの未来への責任だと

思うのです。近代社会は、つねに「発展」を眼差して来ました。近代の突端で、私たちは「錯誤」を起こしています。土も海も、そして空気が汚染してしまった人々は、還ってゆく場所を失ったに等しいと思うのです。もう一度、どんな社会のあり方が必要なのか、人間にはどんな生のあり方が可能なのか、人文社会が支え持つ重要なテーマなのだと思います。しかし、これまで私たちがやってきたことというのは、過去のあの時点においての物事に対する批判であったり、あるいは反批判であったりするわけですが、私も歴史研究ですから、そういう訓練を受けてきました。何か新しいことを創り出すということについて、「迂闊なことを言っではいけない」タブーのような風潮さえあります。何かを新しく創造することに対してはまったく能力がないということ、今更ながらに感じています。いずれにせよ、私がここ四ヶ月間、自分の中で考えてきたことの一つは、土と海の奪還、ということだと思います。これは多分、とても難しいことなのだと思います。具体的にはそれの一つ、私の方から挙げたいと思います。

鵜飼 それはもう大変な時間がかかりますね。

イ 私たちも忍耐を、ということですね。すぐ結果が見えなくても焦らずにそれを見る、という。それからもう一つ。私は、これまで、思想的な系列がいろいろあって、この人はこういう立場の人でこういうことを言っている、とある程度は分かっていたのです。それに関してこれからは、もしかして境界線ということが少し崩れていくので、従来のラベル張りということではなくて、ちょっと変わっていくのかもしれないと思います。もう一つは、個人的な望みなんです。少し立場が違っていても、この社会をなんとか、少しでも良いかたちにとにかく基本的生活がみんなできるように。お金を持っている人も、権力を持っている人も、一緒に暮らせるような社会になるために、そこに目標が一つあれば、少し立場が違っていても、少しずつ和解しながら、少し寛大な観点から見ながら、そこに向かうような、そういう態度も必要になるのかな、と。結果はすぐには、一年や二年では出てこないだろう。だけでも、結果が

出るように、闇の中でも、とにかく歩み続けていく——そんな態度をどこかで獲得していくことが大事だと思います。もちろん、一人じゃ難しいので、声を掛け合いながら。本多 最初のイ先生のご質問は、構造を変えるために人文社会科学はどうあるべきか、ということだと思うのですが、今のお話にもあったように、一夜で全部変わることではないと思うのです。タイプは様々ですが、これまでも陰に陽に構造を変えろというようなことは、日本の歴史学や思想史上において試みられました。最も有名なところでは、福沢諭吉の文明化構想が、精神構造の変革を期したことです。江戸時代の思维様式は、今後の社会を形成していくうえで桎梏にしかなりえない、人々の精神の文明化を図らなければならない、と。それを参照しつつ、丸山眞男さんが、日本社会の人々の精神構造を研究対象としたことはあまりにも自然なことでありました。しかし、今は、そこに連なるなどという大仰なことではなくて、もっと地味に、人々の思考に何らかのインパクトを与えようか、新しい思考の方法を提供していくと

いうことが重要ではないかと思うのです。

ちょっとエピソード的な話なのですが、

私の勤めている大学に、私と同年の学生さんがおりました。今年の三月に卒業されたのですけれども、彼は一度社会人をやったから大学に來られた方です。彼とこの間喋ったときに、やっと本音を言ったな、と思ったことがあります。彼によれば、今まで選挙の際、地域の中で頼まれて、自民党の代議士、あるいは市会議員等々の援助や支援を、半ば強制的に、半ば自明なものとしてずっとやってきた。しかし、その結果、自分の町の近くに、自民党の政策によって、原発が置かれて、自分の町が汚されて、自分の町から工場が次々と撤退していくという有様を見て、自分は間違っていたのかもしれない、と言うんです。政治を即自的にではなくて、対自的に捉えるようになったということなのでしょうが、自分の利益について一回突き放して考えてみてその上で一票を投じるというような、そういう行動がとれなかったこと、そしてその結果としてこういう大きな災害が起こったこと、そうしたことがあって初めて、自分の

それまでの振る舞いに一つの原因・問題があったのではないかと考えるようになった、というような話をしておりました。そういう人は少なからずいるはずですよ。そのような人は、こういう事故が起こらなくても、あらかじめ何らかのデータなり言説なりが提供できていれば、あるところで気がつくことができたのではないかと思います。そういう彼らに届くような作品、あるいは、日々の小さなふるまいの一つ一つを点検し直すべく、自身を振り返るきっかけになるような作品を書くことが求められているのではないかと、思っています。

敷衍してさらに言いますと、政治学者の福田敏一さんが、国民的利益を立ち上げなければいけないと一生懸命述べている文章があります。この国民的利益というのは、日本人の利益とは表現し得ないものです。日本人というのは所与の存在で、生まれたときからずっとあるものだ、国民的利益というのは全く違う、と。自分たちが住んでいる地域、あるいは置かれている状況、これに関するデータを集め、正しく分析し、自分にとって本当の利益を自ら主体的に考

え、選んでいくような人たちが「国民」という風と呼んでみよう、と。この「国民的」という言葉は現代では排他的言葉として評判が悪いんですけども、彼の主眼は、あらゆるデータがきちんと提供され、自分で自分にとっての利益が何なのかをきちんと判断できる条件が整えられること、にあるのです。このようなことを福田さんが、一生懸命書いているのを読んだことがあります。

それとちょっと似ていることを言いたいのですが、「日本人の精神構造を変える」とか大きい話ではなくて、福田流に言えば、国民的利益について判断の材料になるような情報、あるいは、そういうものの読解を助けるような知というものが必要な、と思います。

鶴岡 変革の時間、ということなのですが、けれども、今のこの時点に限っても、本当に生きている時間が非常に違うので、変革の時間を生きていく主体がどこでまとまっていけるか、大変難しい時期だと思います。精神構造を変えろという場合、福沢諭吉もそうでしたけれども、ヨーロッパに理念的

なモデルを求め、「それに対して日本人は」というタイプの議論が多かったように思います。しかし、原発の問題は日本だけでの問題ではありません。

いわゆる「原子力ムラ」と言われている人たちのメンタリティーの特徴も、それ自体は、別に原子力関係者に限らないものです。インサイダーとアウトサイダーを峻別して、権力を分有しているとみなされた人々のもたらす情報しか信じようとしないう。反対派からの批判は反論するためにしか読まない。今回の事故は、それですと来ていたことの果てに起きた破局だろうと思います。その意味で、この間よく言われています。けれども、日本の組織の非常に良くない体質が集中的に出てきている。けれども、それは原子力ムラに限らず、日本に限らず、あらゆる組織にみられるものです。

今日の新聞を見ると、三月からの転入・転出の数では宮城県が一番転出した人が多し。福島県はそれに続きます。岩手はむしろ宮城と福島から転入した人もいるので、比較的、数からすると深刻ではないということのようです。今回の震災と原発事故の

結果、この地域からさらに人口が減っていくこと自体が、非常に深刻な問題だと思えます。確かにこれは東北だけの問題ではないし、北関東の生産者の状況も非常に深刻です。中産階級で一定経済的に余裕があり逃げられる条件のある人と、地域の産業構造の中にあって逃げられない人と、一次産業に携わっていて汚染による転業を余儀なくされる人。その他、多様な状況を考慮すると、既に「逃げる人」「留まる人」の二分法で整理できる状況ではないと思うのです。故郷を喪失したり、もはやこれまでとは同じように故郷で生活ができなくなったといった、故郷喪失の経験をトータルにどう思考するべきか、あらためて考えなければならぬでしょう。日本では「故郷」という言葉は、おそらく五〇年代末くらいから思想の言葉としては姿を消してしまつて、六〇年代以降は日本中であるレベルの同質化が進みました。多くの人が大都市に移住し、変革の場としての故郷ということが思考不可能になっていきました。私の世代が関わった地域闘争で言えば成田空港の建設に反対する運動が中心的課題としてあ

り、原発運動もそのような地域住民闘争の一部をなすものと考えられていました。

六月の五日と六日、福島に、本当に短い時間でしたけれどもうかがって強く感じたのは、まずやはり放射能の問題です。若いお父さんやお母さんを中心にした運動ですけれども、行政が発表するデータも処方箋ももう信用できない、自分たちの健康、子供たちの健康は自分たちで守る、そこから始めるしかないという覚悟を決められた方たちに多数出会うことができました。ここで先ほどイさんが出された問いに戻りたいと思います。人文学・社会科学がやるべきことは、個々の運動の弱点をあげつらうことではなくて、かつての母性ファシズム的な女性運動であれ、これまでの原発運動であれ、そうした運動がなぜ限界を超えられなかったのか、どう問題を組み替えれば未踏の領域に進めるのか、歴史を学び直しつつ思考することでしょう。福島から私は今の状況の深刻さが逆に、初めてのチャンスになるポイントを含んでいるのではないかという感触を持って帰ってきました。

東京で通常思われているよりはるかに豊



かなかたちで運動は始まっています。福島では、『まていの力』という本に出会いました。飯館村で三月一日以前、という村作りがされてきたか。七〇年代・八〇年代とも違う、現代的な地域の村作りを進めてきた共同体が避難を余儀なくされている。三月一日以前に形成されてきたものの中に、以後の変革のためのヒントがたくさんあるのではないのでしょうか。その意味でも、飯館村の人たちがいつか村に戻るような変革の方向が出てくることを願わず

にいられません。きわめて困難な課題だとは思いますが。

山内「まてい」という言葉なんです、私の実家でも使われるのです。小さい頃から掃除などを「ちゃんとまてにやらいよ」と言われてきました。おばあちゃんとかが、「ちゃんとしなさいよ」とお説教をする時などに。おばあちゃんには「まて〜にやれよ」というように言われるのですよ。「まて〜にやれよ」というときは、ちゃんとやんなきゃいけない、という気持ちになる言葉ですね。

(二〇一一年七月九日実施)

註

(1) 慶応義塾大学ホームページ(五月一日付)より。<<http://www.keio.ac.jp/ja/news/2011/kr743000065wv2.html>>

(2) 「保守といわれる知識人のなかに、どうしても美しく保存されるべき豊葦原瑞穂の国を、何万年にもわたり汚染してもいいと考えている人が少なくないのか、私にはまったく理解できない。それに、いかなる人の故郷も奪われてはならない。エネルギー問題をイデオロギーに囚われて争っているのはならない。」西尾幹二ブログ(七月五日付)よ

り。<<http://www.nishiokeiji.jp/blog/?cat=26>>
(3) 開沼博『フクシマ』論——原子カムラはなぜ生まれたのか』青土社、二〇一一年。